# 今日は、ねこねこフェスティバル♪

くまのすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
今日は、ねこねこフェスティバル♪

【Ｎコード】
Ｎ５２３５Ｍ

【作者名】
くまのすけ

【あらすじ】
登校途中で猫をたくさん見かけて、今日はラッキーデー♪　な話。
でも、現実はそんなに甘くもなくて・・・・・・
読んでくれた人がほのぼのとしてくれるといいな。

教室に入ったボクを追い越して、フワフワロングの平野が、ショートでメガネの宮田さんの胸に飛び込んでいった。
「あかりぃ～　ねぇ、聞いてぇ～」
家は近所だけど、隣のクラスのはずの平野は、甘えた声を出す。
「ん？　なぁに？」
宮田さんも、いつものようにやさしくおだやかに返事。
「すごいんだよ。今日ね、私、絶好調だよ！　人生最大のハッピーデーだよ！」
女同士で抱き合って、目の前の通路をふさいでくれているので、ボクは自分の席につけない。仕方なく、まだ来ていない悪友の机に尻を乗せ、ボーっと窓の外を眺めていた。
「今日ね、今日ね。学校来るとき、ネコさんたち、１７匹も見かけたんだよ！　１７匹だよ！すごいよ！　ねこねこフェスティバルだよ！　今日は絶対、ラッキーデーだよ！」
もうすぐ県大会とかで早朝から練習している野球部員たちが、グランドを駆け回っているのが見える。そして、耳には平野が興奮して、まくし立てているのが聞こえていた。
「そう、良かったわね。大好きなネコさんたち、そんなにたくさん見かけたんだ。本当に、きっといいことたくさんあると思うよ」
宮田さんが、やさしく微笑みながら、平野の髪をなでるのを目の端でとらえていた。
「うん！　大好きだから、学校来るときに毎日数えてたけど、１７匹なんて、初めて！　すごかったぁ～　きっと、今日は私、人生で一番幸運な日になるのだわ！」

やがて、放課後――
「宮田さん、これありがとう」

ボクは、４時間目の数学の時間から、宮田さんに借りっぱなしになっていたコンパスを返した。そのコンパスを大きな手で受け取りながら、宮田さんは小首をかしげて、ニコリと微笑む。
「でも、忘れ物、最近多いね？　なにか悩みでもあるの？」
「え？　ううん」
たしかに、最近、ボクは忘れ物が多い。その理由は分かっている。悩みとかじゃなくて・・・・・・
「たぶん、忘れ物が多いのは、もうすぐ発表会だからかな」
ボクの返事に宮田さんも納得顔。
「永友くんの演奏する曲、結構難しい曲だから、毎日練習大変なんだね。発表会まですぐだから、お互い頑張ろうね」
「ああ、頑張るよ。宮田さんもな」
「うん！」
メガネ越しに眼がキラリと光ったような気がした。

それから、帰り支度をしていると、開いていた前のドアからまた平野が突進してきた。
「あかりぃ～！　今日は全然だったよぉ～」
情けなさそうに、顔をゆがめて、今朝のように、宮田さんの胸へ飛び込んでいく。
「あらあら、どうしたの？　今日はラッキーデーにならなかったの？」
「うぇ～ん！」
平野は、泣きまねしながら、宮田さんの肩に顔をうずめた。
「朝から、宿題忘れて、先生に怒られたし、階段でこけて、膝すりむいちゃったし、お弁当のおかずにピーマンが入っていたし！　それに、それに、さっき、鈴木君、木下さんと仲良くおしゃべりしながら、帰っていったの見ちゃったよぉ～　うぇ～ん！」
困ったなって顔して、宮田さん、一瞬、ボクの方を見たけど、すぐに、ボクよりもピアノを器用に弾きこなす大きな手で、平野の頭

の天辺をなで始めた。
一瞬、平野は全身を固くした。でもすぐに、体の力を抜き、宮田さんに体を預けた。
「あかり。大好き！」
「そ、ありがと」

夕方、ボクが幼稚園のときから通っているピアノ教室の控え室に入ると、今日は先客がいた。宮田さん。
お互い軽く会釈して、部屋の隅に並べられた椅子に腰掛ける。
でも、今、ボクは宮田さんと二人きりでひとつ部屋にいる。間に2つほど椅子があるけど、シャンプーの匂いが漂ってきている気もしないではない。
意識するなって方が不自然。でも、ボクには宮田さんを直視する勇気がなかった。
隣の練習室からは、いつもの基礎の反復練習の音が洩れ聞こえている。
手持ちぶさたで、ぐるりと部屋の中を見回しても、子供の頃から見慣れた景色。特別、目を引くものも。
仕方なく、膝の上に楽譜の入ったカバンをのせて、鍵盤代わりに弾きはじめた。
しばらくして、隣の練習室から、たどたどしい感じで曲が流れてきた。
「だれ？　遠藤さん？」
ボクの質問に、ホッとした感じで、宮田さんが返事をくれる。
「そう、今度の発表会で演奏するんだって、張り切ってたよ」
「そうなんだ。バッハの・・・・・」
ラヴァーズ・コンツェルトって、つぶやきそうになって、慌てて飲み込んだ。途端に、顔が上げられなくなって、カバンの向こうに見えている膝小僧をにらんだ。頬が熱い。
宮田さんの方を見る勇気がなかったけど、なんとなく、宮田さん

も同じ曲名を思ったみたいで、息を飲み込んだ気がする。
やがて息をひそめているのに、耐え切れなくなって、深呼吸を二つ。
やっと、顔が上げられた。
宮田さんは、じっと足元に視線を落としていた。首筋を抑えるように、白い手が添えられている。その白い手が目に入った瞬間、なぜか頭をなでられて、うれしそうにしていた平野の姿が浮かんできた。
「ねぇ？　ボクのうち、平野の家の近所なんだけど」
「え？　うん、斜め裏ね」
「ああ、今朝、学校来るとき、偶然、ずっと平野の後ろを歩いてたんだ」
「そうなんだ」
「だから、ボクも『ねこねこフェスティバル』のはずなんだけどなぁ～」
天井を見上げて、冗談めかせて嘆いてみせる。
「今日は、忘れ物するし、廊下走ったたって怒られたし、体育のサッカーでボール蹴りそこなったし・・・・・・」
クスッ
宮田さんが口元を抑えて笑った。
「そうね永友くん、ボール蹴らないで、なにもないところを蹴ってたもんね。それも、5回も」
「ああ、おかしいよなぁ。ちゃんとボールを狙って蹴ってたんだけど」
「そうね。うふふふ」
「ああ。間抜けだよな。何回も、何回も・・・・・・　ん？」
そのとき、ふっと疑問に思った。あれ？　ボクは、5回も蹴りそこなったんだ。たくさん失敗したのは覚えているけど、回数まで覚えてなかった。

「宮田さん、ボクの失敗を数えてたんだぁ～　ひどいなぁ～　あはは」
　また冗談のつもりで、そう言いながら、わざとらしく頭のうしろをカリカリと掻いていたのだけど、その視線の先で、宮田さんのメガネの向こうの目が泳いだのをしっかり見ていた。
　ボクは、その瞬間、朝の平野の言葉を思い出していた。
　――うん！　大好きだから、学校来るときに毎日数えてたけど、17匹なんて、初めて！

　そのとき、あの17匹の猫たちがダンスを始めた。
　バッハの曲に合わせて。
　お互いの周りをクルクルと回る。
　優雅に華麗に・・・・・
　今日は、ねこねこフェスティバル！

## （後書き）

もともとブログ（『恋とか、愛とか、その他もろもろ・・・・・・』ｈｔｔｐ：／／ｌｏｖｅｅｔｃ．ｓｅｅｓａａ．ｎｅｔ／）の方で掲載していた話だけど、結構、気に入ったので、こちらにも転載です。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5235m/

今日は、ねこねこフェスティバル♪

2010年10月8日14時20分発行